

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

〈日本語解説〉「グローバル客家：言語・文化の世界的趨勢を考察する」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009524

〈日本語解説〉「グローバル客家——言語・文化の世界的趨勢を考察する」

本稿は、「〈客家エスニシティとグローバル現象〉国際学術シンポジウム」の講演録である。特に「南側地域」の客家について議論する前提として、客家研究におけるエスニシティ問題を論じることを目的としている。張維安の講演が目にするのは客家語であり、グローバルな規模での客家語の喪失と客家アイデンティティの関係性について論じている。講演の概況は次の通りである。

- 客家とは何か。何をもって客家とみなすのかの基準は多岐にわたるであろうが、そのなかで客家語は最も重要な要素の一つである。
- しかし、世界的にみると、客家語は次第に失われていく傾向がみられる。相対的に中国本土、台湾、香港、東南アジア諸国は客家語人口が多いが、香港をはじめとし、これらの地域でも客家語が次第に失われていく危機に瀕しているところがある。1971年の第一回世界客家大会では皆が客家語を使っていたのに、現在では客家語が共通語として使われなくなった。
- 世界的に客家語が失われていく要因はさまざまである。移住先で客家がマイノリティであった時、どうしてもマジョリティの言語に呑み込まれていく。通婚などにより、客家語を使う状況が家庭でも少なくなっていることも原因として挙げられる。また、そもそも客家語といっても多様であるので、異なる客家語を使う人々の間で、客家語が共通語になることもない。
- したがって、客家語は徐々に失われていくが、現在、客家を話せなくても客家としての強いアイデンティティをもつ人々がいるのも確かである。林文映が指摘するように、今は「ポスト客家語時代」に突入しているのである。日本の客家がまさにその典型例であろう。「ポスト客家語時代の客家アイデンティティ」をどのように考えるかが重要になってくる。

「ポスト客家語時代」に突入しているのは、日本ばかりではない。第Ⅱ部～第Ⅳ部のいくつかの論考が示しているように、「南側地域」のなかにも、客家語を話せないにもかかわらず客家アイデンティティをもつ人々が少なくない。客家語のかわりに、祖先崇拜、英雄・神話など別の要素（しかも実際には客家だけに限定されない要素）を、新たな客家の指標として提示することもある。本講演は、客家をめぐるエスニシティをいかに考えていくかという本書の問題意識と合致した内容になっている。

(河合洋尚)